

69 台湾国立中央図書館所蔵の医心方鈔

本について

杉立義一

『医心方』鈔本で国外に現存するものとして、次の三点が知られている。

- (一) 北京大学図書館蔵 李書目 日本丹波康頼撰
日本抄本 十九卷二〇冊
- (二) 中国医学科学院図書館蔵 据寛政三年抄校本抄
二〇卷二〇冊
- (三) 台湾国立中央図書館蔵 日本東京康氏伝鈔古写
本 二〇卷二〇冊 (国家図書館と改名)

このうち(一)・(二)は未見であるが、(三)については、一九九六年四月二十九日、台北市の中心部にある国立中央図書館を訪問して、同書を実視することができた。

同書は特蔵資料扱いを受け木の板で囲われている。第

一冊に角印が押してある。「九折堂山田氏圖書之印」とよめる。表紙をめくると次に記す序文が書かれている。右、丹波康頼医心方廿本、借之多紀氏事修堂、

友人島氏為余影鈔、如其傍訓、朱点乃余手鈔写焉、以青筆者、桂山先生之標記也、以朱筆抹旁者、余自便於搜閱人名与書目也、起業於丁丑五月、訖於今茲庚辰三月、因記曰、六朝以下迄於李唐、我方技之書、存於今者僅不過數家、而捃隋唐經籍志檢之、即其逸者不知幾百部也、但王氏外台秘要、採摭頗広、有存其典型者、故不特方技家尊重之、攷古学者、亦復有取於此矣、然其書已經宋諸臣校之、故意趣雖旧属貫、字句或多改易、則不能無遺恨、独出於此右者、為医心方、康頼編此書、其所引用百余家、皆六朝乃唐代之書、而且有經籍志不録者、王氏書不載者數十家、而其見存之書、亦体裁字句、問有大異、按、

皇朝往昔、通信使於唐國、留学之徒相繼不絶、

二百有余年、而所齋未載籍、即當時時之鈔本、

所直得於宮庫或学士、非如趙宋而降、假工賈之手、以成帙者也、康頼蓋資用於此、故皆是原書之旧、而所以異

於見存者也、試拳一二證之、其引千金方、有合藥時啓告十方、三宝及上古、医先求諸病愈章、而宋校本属刪削、考之真本千金宛存此章、真本千金殘刪多紀藍庭所藏 真本千金鈔本不經宋校者

又有本艸総目、改是蘇敬本艸卷次部分及藥品之數、尽与證類本艸所称相符、又、如白虎為白獸、葉字作葉之類、皆可以見唐人之旧矣。其今字体純古可以資小学者

輿松作吳公斑猫猫作斑蘭、痛痒之痒作蚌瘡之瘡作創之類是也 不違枚拳也、豈不珎而貴之乎、故余以宋校外台秘要、次於此書之下、殆不過論歎。

此書近古係仁和寺帳、秘無人得見、寛政辛亥再顯於世事、詳於藍溪先生跋文。宝永中関白予榮藤公、百方搜索遂不能得、即謂属逸書享保壬寅、幕府下、命、録本朝書籍目中散逸者。

本朝書籍目録、永享己未源大將軍義教命清原業忠輯録世修仁和寺書目者謄 大求於无 下此書亦在其中。

而猶且不顯於世今也、如余一陋医、容易得藏此書、実可謂太平之澤矣哉、 記以告子孫、

文政三年皐月福山藩伊沢信括

(段落は筆者による。旧漢字は新体に改めた。)

卷一卷首には次の目録を記す。卷一論、卷二針灸、卷三方部、卷四髪方部、卷五耳目口舌齒部、卷六陰蒼并穀

道部、卷七卒死并傷寒部、卷八諸病服石部、卷九婦科部、卷十産婦図、卷十一小兒部、卷十二飯食部一、卷十三飯食部二、卷十四丹毒瘡部、卷十五積聚并水脹部、卷十六咳嗽部一、卷十七咳嗽淡症部二、卷十八服食部、卷十九霍乱部、卷二十大体修身養生部、各巻の表紙にはこの名称が記してある。

この序文并に内容と殆んど同じ抄本が、大東急記念文庫に所蔵されている。大東急本では筆写した人物名を、友人嶋武としているが、台湾本では友人島氏となっている。森鷗外の小説『伊澤蘭軒』では嶋武としている。蔵書印も大東急本は三ヶ、台湾本は一ヶのみである。また台湾本は序文の字数が二字少い。これらより台湾本は大東急本を重抄したものと考ええる。

(国際日本文化研究センター)